

亡き人恋ふる

俊成の家は五条室町にてありしなり。定家卿、母に後れてのちに、俊成のもとへ行き見て見侍りしかば、秋風吹きあらしめて、いつしか俊成も心細きありさまに見え侍りしほどに、定家の一条京極の家より父のもとへ、

玉ゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風

と詠みて遣はされし、あはれさも悲しさも言ふ限りなく、もみにもうだる歌様なり。「玉ゆらは、しばしといふことなり。末に「秋風」を置きたるまで、あはれに身にしむに、「亡き人恋ふる」とあるも、悲しう聞こえたるなり。俊成の返歌に、

秋になり風の涼しく変はるにも涙の露ぞしのに散りける

とすげなげに詠めるが、何ともえ心得ぬなり。定家は母のことなれば、あはれにも悲しうも、身をもみて詠めるは理なり。俊成はわが女房のことなり。わが身はや老体なれば、あぢきなし、悲しなど言ひては似合はねば、ただ、折、秋になり、「風の涼しく」と何となげに言へるが、何ともおぼえず殊勝なり。

【口語訳】

俊成の家は、五条室町にあった。定家卿が、母に先立たれて後に、俊成のもとに行って見ましたところ、秋風が（庭を）吹き荒らして、いつのまにか俊成も心細い様子に見えましたので、定家が一条京極の家から、父のもとへ、

ほんのしばらくの間も露の玉も涙の玉も少しも止まることはない。亡き人を恋しく思う家に吹く秋風のせいで。と詠んで贈りなされた歌は、哀れさも悲しさも言い尽くすことができず、心を碎き、身をもむように深く思いを込めている歌の詠みぶりである。「玉ゆら」は、しばらくということである。（歌の）最後に「秋風」を置いているので、しみじみと身にしみるうえに、「亡き人恋ふる」とあるのも、悲しく聞こえているのである。俊成の返歌に、

秋になり、風が涼しく変わるにつけても、涙の露はしきりに散るのであるよ。

とそっけない様子に詠んでいるのが、なんとも納得できないことである。定家は母のことなので、哀れとも悲しいとも、身をもむようにして詠んでいるのはもったもななことである。俊成は自分の妻のことである。自分の身はもはや老体なので、むなしい、悲しいなどと言うのは似合わないのだ、ただ、時節が秋になって、「風の涼しく」と何ともなさそうに言っているのが、なんとも言えずすばらしい。